手袋にかける

「あーあ、何で手袋会社なんや！三丁目のラーメン屋がよかったのに！」真人は、秀明に向かってぼやいた。

「俺やって、隣町のケーブルテレビが第一希望だったんや。手袋会社なんて年配の人達しかおらんのやろうなあ。」

秀明も、ため息をつきながらそう答えた。

同級生の二人は、来週から始まる職場体験活動の打ち合わせをするため、訪問先の手袋会社に行くところだった。当初希望していた飲食店やテレビ局は、体験希望者があまりにも多く、全員が希望通りというわけにはいかなかった。

担任の山口先生から、

「手袋会社はどうや？　知り合いが働いとるけど、おもしろいらしいぞ。」

と声をかけられた時、真人も秀明も、どうしても嫌だとは言えなかったのだ。

重い足取りで会社の玄関に入った二人を迎えてくれたのは、山口先生の教え子だという若い男の人だった。緊張しながらあいさつをする二人に、男の人は、

「ここで手袋のデザインをしている工藤です。担当の森さんがもうすぐ来るから、それまで僕に何でも聞いてよ。」

と、声をかけてくれた。

そこで、まず真人がいくつか質問をした。

「この会社のみなさんは、具体的には、どんな仕事をしているんですか？」

「大きく分けると四つかな。手袋のデザインをする人、それを実際に作る人、でき上がった製品を

販売する営業の人、それと材料やお金の管理をする人。それぞれが協力し合って、手袋ができているんだよ。」

「仕事をしていて、うれしいことや、逆につらいことって何ですか?」

「そうだな、休みの日にデパートの売り場をのぞいて、自分がデザインした手袋をお客さんが手にとって買っていく様子を見た時は、心の中でガッツポーズするぐらいうれしいよ。逆に、たくさん売れ残ってるとショックだな。何がいけなかったのかなって、悩む日が何日も続く。もう投げ出したくなるよ。」

そう言って、工藤さんは笑った。

秀明が、ずっと疑問に思っていたことを、思い切ってたずねてみた。

「この町は、手袋産業で有名だけど、だんだん衰退しているって聞いたことがあります。どうして、若い工藤さんが、この仕事を選んだんですか?」

「うーん、そうだな……。」

少し間をおいて、工藤さんは静かに語り始めた。

「大学卒業後すぐは、わりと有名な広告代理店にデザイナーとして就職したんだ。働き始めて二年目の夏だったかな。ちょっと疲れて帰省した時、以前から知り合いだった森さんにばったり出会った。君たちを担当してくれる、ここの営業の人だよ。近況を話し合ううちに、僕自身の仕事の悩みも打ち明けた。その時、森さんから、香川に戻って、一緒に手袋を作らないかって誘われたんだ。

『若い人はここを嫌って、すぐに都会に出て行きたがる。だけど、この町には世界に誇れる地場産業があるんだ。君のデザインの才能は、なかなかのもんだ。それを生かして、手袋業界を、もう一度盛り立てていかないか。』

そう言ってくれたんだよ。あの言葉は今でも忘れられない。あの時、初めて僕の心の中で、自分の大好きなことで、生まれ育った地元に恩返しができるかもしれないという気持ちが、わいてきたんだ。」

ちょうどその時、事務室のドアが開いた。森さんであった。
「遅くなってごめんよ。君たちがうちに職場体験に来てくれる子だね。中学生が、手袋に興味を持ってくれるなんて、本当にうれしいよ。」
真人と秀明は困ったように顔を見合わせた。
「うちの会社について知りたいことがあれば、何でも説明するよ。」
そう微笑む森さんに、真人が聞いた。
「この会社の自慢できるところや、苦労している点は何ですか?」
「一番の自慢は、それぞれの担当の人たちが、他の担当の人たちのことを思いやりながら、自分の仕事に責任を持って取り組んでいることかな。そうだ、これを見てくれるかな。」
工藤さんが分厚いノートを差し出した。真人が手にとってぱらぱらとめくると、そこには雑誌の切り抜きや写真、洋服のスケッチ、そして手袋のデザインらしきイラストが数え切れないほどあった。

「時間ができると、僕は街中を通る人たちのファッションを観察したり、いろんな雑誌で今年の流行をチェックしたりする。あの女の子が来ているセーターの色や柄には、こんな感じの手袋が似合うかなとか、あのおじいさんの雰囲気だと、このデザインなら気に入ってもらえるかなとか…。そうやって考えながら、手袋のデザインを、そのノートに描きためていっているんだよ。」
工藤さんの言葉にうなずきながら、森さんが話を続けた。
「僕が担当している営業の仕事は、また違った苦労がある。せっかく仲間の努力で出来上がった手袋を、少しでも多くのお店に置いて売っていただくために、たくさんの人に会いに行く。時には、うるさがら

れて、ひどい言葉をあびせられたこともあるよ。でもうちの手袋の素晴らしさをわかってもらうためには、誠実な態度で粘り強く説明して、相手に信用していただくしかないんだ。」

秀明は、思わず、

「手袋を作って売るのが、そんなに大変なことだって、僕、今まで全然知りませんでした。もっと単純で、つまらない仕事だと思ってたのに……。」

とつぶやいた。

「ははは、正直だな。確かに手袋業界は、今、大きな局面を迎えている。この不況だろう？　食べ物なんかと違って、手袋がなくても、人は生きていけるし、何より今は外国から安い品物がどんどん入ってきている。今までと同じ事をやっていたんじゃだめなんだ。」

「それは、どういうことですか？」

と真人が聞き返すと、答えてくれたのは、工藤さんだった。

「防寒用だけじゃなくて、夏の強い紫外線から腕を守るための手袋。それから、最近では、はいたまま携帯電話を簡単に操作できるような手袋を開発している。手袋の技術を生かして、他のウェアやバッグも作り始めているんだよ。」

最後に秀明は、二人がこの会社でずっと仕事を続けている理由を聞いてみた。

「他のどこの物よりも、やっぱり香川の手袋は品質が良いと、認めてくださるお客様がたくさんいる。手袋は、

紫外線から腕を守る手袋

はめたままタッチパネルを操作できる手袋

香川県が世界に誇れる地場産業だよ。それを、この町の小さな会社から、自信を持って発信し続けている。その思いが、二十年近くこの仕事を続けてこられた、一番のエネルギーかな。」

と、森さんは少し照れたように答えてくれた。

「僕は、仕事で一度挫折したけど、地元に帰って自分のやりたいことをやっと見つけることができた。仲間と信頼し合って、助け合いながら、一つのものをみんなの力で作り上げている。大げさかもしれないけれど、それが今の僕の生きがいだし、ずっと追い続けていきたい夢なんだ。」

そう語る工藤さんの目は、生き生きと輝いていた。

その後、来週からの三日間の体験活動について、細かな打ち合わせをしてから、真人と秀明は会社をあとにした。

「俺、手袋に興味があって、訪問先を選んだんと違うのに、森さんをだましたみたいや……。」

そう、ぽつんと口にした真人に、秀明が笑顔で答えた。

「ええやん、これから実際に仕事を手伝わせてもらって、もっと手袋産業のこと知ったら。俺たち、いい職場体験ができそうな気がするな！」

「そうやな！」

来週からの活動のことを考えると不安もあったが、二人の心の中には、明るく、はずむような思いがあふれ始めていた。